

私は忘れない

有賀 元彦 さん（76歳・豊科高家）

「あの状況生き延びたのは何かに生かされたとは思えない」と話す有賀さん。（自宅にて）



61回目の終戦記念日がやってくる。戦争を体験した人が年々少なくなり、その記憶も風化していく中、自らの体験を刻銘に記憶している、安曇野市豊科日中友好協会理事長、県日中平和友好会会長の有賀元彦さんにお話しを聞いた。

14歳で中国へ

有賀さんは昭和19年6月、満蒙開拓青少年義勇軍斉藤中隊の一員として、多くの仲間とともに中国へ渡り、戦後にかけて想像を絶する体験をしてきた。

耳の横をかすめる弾丸

嫩江（ノンジャン）訓練所を経由し、興安（コウアン）に移動しました。耕地の手入れや、牛・馬などの世話、銃剣術の訓練などもしながら、厳しい冬を越え終戦直前のソ連軍満州侵攻まで過ごしました。

関東軍に置き去りにされた避難民と共に逃避行を開始したのが昭和20年8月13日。連れて行けなくなった我が子を置き去りにしたり、殺める母親、襲いかかる盗賊とともに自爆する兵隊、皆が飢

私の横で静かに亡くなりました。

翌朝、少年は再び現れると、私を自宅の床屋さんへ連れて行きました。そこのご主人はストープの番をするよう手招きし、奥さんは自分のためにわざわざお米のおかゆを作ってくれました。家の人は粟のおかゆを食べているのです。

その後、ご主人の紹介で別のお宅にもお世話になりましたが、そちらでも大変良くしていただきました。高熱にうなされ死の淵をさまよったときも、献身的な看病をしてくれたり、仕事をしながら勉強までさせてもらいました。内蒙古自治政府準備委員会や、中国人民解放軍にも関わり、昭和28年5月に帰国しました。23歳になっていました。

子どもたちへ

「その後有賀さんは、日中国交正常化後、何度訪中しても見つからなかった命の恩人（床屋の「主人」）の消息を、平成11年、偶然につかむことができた。ご主人は既に亡くなっていたが、その娘さんに会うことができたのである。

「私の命を救ってくれたこの地の皆さんへご恩返ししたかった」との思いから、生き残った仲間、協会の仲間と、中国の子どもたちのため、学校建設などに携わってきた。

「少年の物語を本にまとめたい」と静かに語る有賀さん。二度とあのような経験を、子どもたちにさせないために。

一人また一人と仲間が倒れ、ただ死ぬのを待つだけでした。

人はあのような体験をしているのに、

今も世界のどこかで争いごとをしている。

えと疲労で極限的な精神状態でした。私自身、友人と並んで歩くその顔と顔の間を銃弾が突き抜けても、死への恐怖を全く感じませんでした。そして、何が特に悲劇とも感じなくなっていました。

終戦を知り武装解除後、現在のウランホト市の捕虜収容所へ収容されたのが9月。ここまで生き残れたのも奇跡なら、その後起こる不思議な出会いも奇跡と呼べるかもしれません。

自分の名前がわからない！

私を含む100人ほどはすぐに別の難民収容所へ移動させられました。暖かいうちは町

で仕事を探し、かろうじて皆で生活できましたが、冬を迎えると、マイナス40度にもなる厳しい環境で仕事もなくなり、寒さと飢え、そして病気にひたすら耐えなければなりません。一人また一人と仲間が倒れ、ただ皆が収容所の中で死ぬのを待つだけでした。私もまた、自分の名前さえ思い出せないほど衰弱していました。

私の命を救ってくれた出会い

ある日、ふと気が付くと一人の少年が、座り込んでいる私の前にそっとときび饅頭を並べ、立ち去っていきました。久しぶりの食料を仲間と分け合い、ゆっくり噛みしめました。涙が止まりませんでした。一緒に食べた仲間の一人は、その晩、

←共に渡った仲間の写真。（最前列右から4人目が有賀さん）

